

村治重厚校  
 熊谷直温校  
 安藤正胤校  
 原病學通論  
 四

ヤ 3  
 1362  
 4





73  
1362  
4

Handwritten text in vertical columns, mostly illegible due to fading. The text is contained within a faint rectangular border.



91-1960





原病學通論卷之六

目次

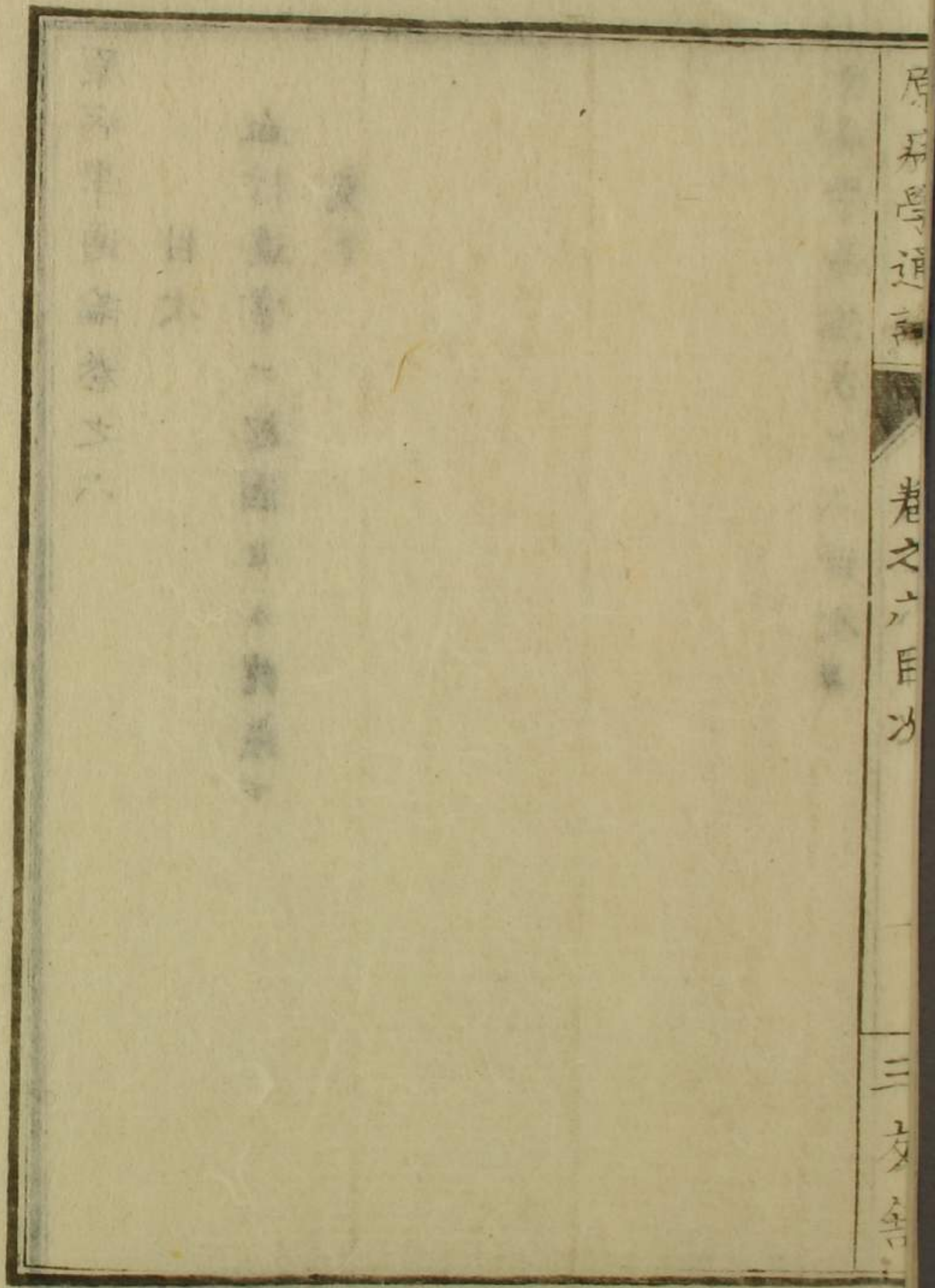
血行違常二起因ヒル諸疾下

灸下

原病學通論卷之六目次畢







原病學通論卷之六

和蘭教師 亞爾蔑聯斯 講述

東京 安藤正胤

勝所 村治重厚 筆記

松江 熊谷直温

血行違常ニ起因セル諸疾下

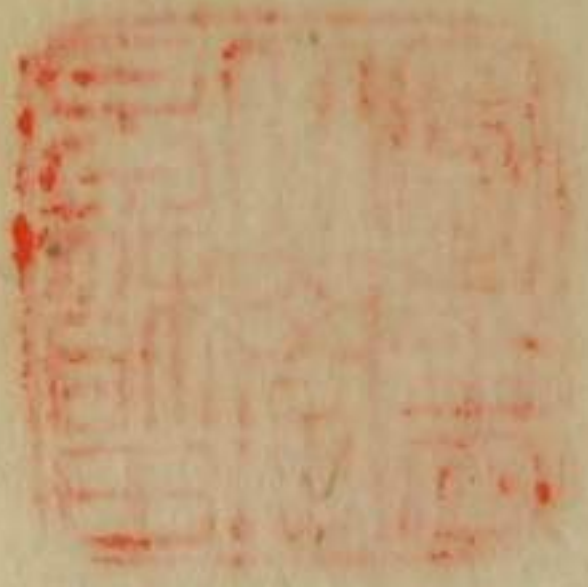
炎下

組織ノ類廢

總テ炎ハ、必、多少組織ヲ類廢ス、或ハ組織ノ類廢  
些少ニシテ、炎ノ消散後恢復シテ、其痕跡看ル可



カラサル者アリ、例ハ、粘膜炎ハ、多少其内皮層ヲ  
 類廢スト雖、速ニ恢復スルカ如シ、或ハ全ク恢復  
 セサル者アリ、例ハ、諸組織ノ、劇シキ潰瘍後ニ多  
 少組織ヲ失スルカ如シ、持ニ甚シキハ、梅毒性潰  
 瘍、癌腫性潰瘍、狼瘡、壞疽性潰瘍等ナリ、是其炎勢、  
 盛ニシテ、全ク血管ヲ閉塞シテ、多ク組織ヲ壞死  
 セシムレハナリ、○炎ノ組織ヲ類廢スル原因ハ、  
 數種アリ、又發炎ノ因、兼テ組織類廢ノ源トナル  
 一アリ、例ハ、創傷ニ於ルカ如シ、或ハ炎ノ作用ニ  
 由ル一アリ、例ハ、滲泄物ノ壓迫ニ由リテ、組織萎



縮シ、其部ノ脉管閉塞シテ、終ニ壞死スルカ如シ、  
 或ハ肉芽ノ脈ニ由リテ、組織ノ萎縮スル一アリ、  
 例ハ、骨質炎ニテ、脉管周圍ノ結組織、若ハ海綿様  
 質ニ、肉芽ヲ生シ、漸々發生スルニ隨ヒ、其壓迫ニ  
 由リテ、骨組織吸收セラレ、巨大ノ空洞ヲ生シテ、  
 骨質薄弱トナリ、破碎シ易キカ如シ、或ハ炎勢ノ  
 劇烈ニ由ル一アリ、是、炎ノ為ニ、組織ノ燃燒機、旺  
 盛スルヲ以テナリ、例ハ、局處ニ炎ヲ發シ、全身  
 熱ヲ併發スル時、身體瘦削シ、其食量ニ闕セズ、  
 血中尿素ノ量增加スルカ如シ、尿素ハ、組織中蛋  
 白質ノ、燃燒ヨリ



生スル者ナリ、故ニ血中、多ク之ヲ含ムルニ由ル、  
 燃燒、過劇ニシテ、多ク組織ヲ類廢スルハ、  
 彼ノ類廢セル組織ハ、半ハ變脂シテ、吸收セラレ、  
 半ハ膿汁ニ混シテ、排除セラル、例ハ、皮下組織ノ  
 大膿瘍、開口スルキハ、皮下結締織ノ一分、類廢シ  
 テ、膿汁ト共ニ漏出シ、或ハ腺病家ノ腺炎後、膿潰  
 スルキハ、膿汁ニ混シテ、類廢セル腺組織ヲ排泄  
 シ、或ハ骨炎ニテ、骨質ノ一分ハ、膿汁ニ雜ハリテ  
 洩出シ、漏出ノ骨片、骨疽ニ於テハ、巨大ナル骨  
 片、膿汁ニ混シテ、排泄セラレテ、粉末状ト  
 ル、以テ、内症ヲ判別ス可シ、一今ハ、吸收セラ  
 ル、カ如シ、如此骨質ノ吸收セララル、片ハ、尿中多

ク磷酸、苦土、磷酸、曹達、磷酸、石灰ヲ含ム、以テ骨質  
 吸收ノ盛ナルヲ徴知ス可シ、  
**組織ノ新生**  
 炎ハ、皆多少組織ヲ新生セサルヲ示シ、專、創傷ニ  
 由リテ、組織ヲ失フ時ニ之ヲ見ル、是、必、多少組織  
 ヲ新生シテ、失却ヲ償ハサル可カヲ示レハナリ、  
 又、澄膜炎ハ、假膜ヲ構成ス、其他、許多ノ慢性炎ニ  
 亦組織ノ新生アリ、例ハ、慢性骨質炎梅毒、骨  
 質肥大スルカ如シ、此新生組織ハ、多クハ、常態ノ  
 組織ヨリ成ル、乃、結締織ヨリ成リ、骨格近傍ニ於

原病學通論  
 卷之六  
 三  
 三  
 三



テハ骨組織ヨリ成ルカ如シ然レモ稀ニ異態ノ組織ヲ新生スルアリ乃結核癌腫ノ如キ持異發生物ヲ生スルカ如シ

第一結締織新生ハ必次ニ擧クル所ノ三態ニ出テス甲ハ**瘢痕組織**乙ハ諸器ノ炎ニ由リテ結締織ヲ新生シ漸次ニ増大ス之ヲ**結締織肥大**ト云フ丙ハ結締織ヲ新生シテ偽膜ヲ形成スルヲ**珠ニ登膜面**ニ在リ之ヲ**偽膜結締織**ト云フ甲**瘢痕組織**ノ發生ハ創傷ノ癒合スルニ方リテ能ク察ス可シ其方ニアリハ創部化膿セムシテ直ニ

癒著ス之ヲ**第一癒合**ト云フ一ハ傷

面ニ先膿汁ヲ醸生シ次テ治癒ス之ヲ**第二癒**

**合**ト云フ例ハ創傷ノ銳器利キ者ニ

由ル者ハ直ニ癒合シ之ニ反シテ鈍具如碎片ニ

由ル者ハ先醸膿ミテ次テ癒著スルカ如シ第一

癒合ハ初メ創面ヨリ血液流出シ凝結シテ創傷

ノ兩縁ヲ接合シ外氣ノ竄入ヲ妨護ス次テ創傷

ノ刺衝ニ由リテ近傍部ニ充血ヲ起シ登液ヲ滲

溢シテ創縁腫起ス既ニシテ數時ヲ經レハ傷部

ノ髮細管ヨリ饒多ノ白血球ト蛋白質ヲ含メル



登液トヲ漏泄シ、白血球ノ間隙ニ、新ニ髮細管ヲ  
 生シテ、割縁ノ髮細管ト吻合シ、其白血球ハ、延長  
 シテ、結締織ニ化シ、漸次ニ收縮シテ、對向ノ割縁  
 ヲ牽引シテ接合ス、又割傷ノ激動ニ由リ壞死セ  
 ル部ハ、脂肪變性シテ、溢出セル血液ト共ニ吸收  
 セラル、第二癒合ハ、膿膜ノ後、治癒スル者ニシテ、  
 割縁直ニ密接セス、是、割傷ノ為ニ割縁ノ生力ヲ  
 失スルヲ多キニ由ル、初ノ三日間ハ、割面ヨリ血  
 液ヲ雜フル稀薄ノ澄液ヲ漏泄ス、之ヲ割傷分泌  
 液ト云フ、次ニ白血球ヲ混レル者ヲ滲出シ、概第

五日ニ至リテ、尋常ノ膿汁ヲ漏出ス、彼ノ割傷分泌  
 液ハ、壞死セル組織ヲ細分子ニ化シテ驅除ス  
 ル者ニシテ、特ニ結締織、腱、莖膜、骨片ノ如キ、較  
 大ナル粒塊トナリテ、排泄セラル、初ノ三日間ハ、  
 割面不潔ニシテ、帶黄白色ナリ、是、壞死セル組織尚  
 殘留スル者トレハナリ、第四日ニ至ルニ、割面許  
 多ノ細少ナル圓體ヲ發生ス、之ヲ肉芽ト云フ、其  
 質中、血管ヲ具ヘ、逐次ニ容積數ト増加シ、遂ニ  
 全面ヲ被覆シテ、表面ヨリ膿汁ヲ洩出シ、行斷工  
 ス、如此割面、盡肉芽ニ變スル片ハ、膿汁ヲ漏出、漸



々減少シ、肉芽縮少シテ、堅剛トナリ、血管モ亦萎縮シテ、遂ニ結締織ニ化ス、此變化ハ、先、深部ヨリス、創傷若、皮膚ニ在ルハ、表層ノ肉芽化シテ外被トナル、此新生セル組織ヲ**癩痕組織**ト云フ、初メハ、許多ノ血管ヲ具ヘテ、柔軟ナレド、遂次ニ收縮シテ、堅剛蒼白色トナルナリ、肉芽ハ、其始メテ生スル一日ノ間ニ、顯微鏡ヲ以テ檢スレハ、白血球ヨリ他トラス、其一半ハ、稍細長トナリ、滲漏セル澄液ニ由リテ、聚合維持セラレ、次テ其間新ニ髮細管ヲ生シテ、創縁ノ髮細管ト吻合ス、而シテ

各個大抵二脉アリテ、其質中ニ細網ヲ生ス、肉芽ノ發生増大ハ、髮細管ヨリ白血球ヲ滲漏スルニ由ル、又肉芽ノ表層ハ、内被セルノ被覆スルヲナキヲ以テ、連々膿球ヲ漏出ス、ニ肉芽ト膿球トハ、其ニ其源一ニシテ同シク、白血球ヨリ化生スレトモ、肉芽ヲ形成スル者ハ、細長形ニシテ、膿球ニ化スル者ハ、圓形ナリ、然レド、深部ニ於テハ、白血球、漸々圓形ヲ失ヒテ延長シ、或ハ星芒狀ニ變シテ、結締織セルニ化シ、血管モ亦萎縮シ、全ク結締織ニ化シテ、一ノ異物ヲ貽サス、遂ニ對向ノ創縁ヲ密著スレトモ、最表ノ一層ハ、特、内被セルニ化シテ、之ヲ被フ、故ニ第



二癒合ノ要件ハ肉芽ノ發生ト其結締織ニ化ス  
 ルトニ在リ、肉芽或ハ異態ヲナスヲアリ、肉芽ノ  
 發育過盛ニシテ、創面ヨリ突出シ、尿管ニ富ミテ  
 容易ニ出血シ、化シテ結締織トナルヲ能ハス、常  
 ニ稀膿ヲ漏泄ス、足脚ノ潰瘍ニ多く、瘤腫ノ如ク突出ス、之ヲ贅肉ト云ノ、或  
 ハ肉芽ノ發育劣弱ニシテ、傷部ノ平面ニ達セス、  
 細小ニシテ、經久スルヲアリ、之ヲ遷延外傷ト云  
 フ、虚弱家ニ多シ、或ハ肉芽ノ知覺敏捷ニシテ、輕  
 ヲ抵觸スルモ、尚劇痛ヲ發スルヲアリ、尋常肉芽  
 ハ、神經ヲ備ヘス、知覺ナシ、彼ノ知覺過敏ノ者ハ、

帝ニ尿管ヲ有スルノミナラス、又神經ヲ具フ、殊  
 ニ皮膚ノ外傷ニ多シ、又或ハ傷處ヨリ、偽膜性、若  
 ハ實布的里性滲泄アルヲアリ、創傷ハ、癒合ノ後  
 必、瘢痕ヲ貽ス、初メ柔軟菲薄ナルモ、漸、肥厚シテ  
 收縮シ、本創ノ大ニ較スレハ、其痕常ニ狹小ナリ、  
 故ニ大傷ハ、多ク瘢痕收縮ニ由リテ、種々ノ障害  
 ヲ貽ス、例ハ、火傷、或ハ棋毒性潰瘍ノ、瘢痕收縮ス  
 ルニ由リテ、手指彎曲シ、或ハ他部ト癒著シ、或ハ  
 顯垂レテ、胸廓ニ密著スルカ如シ、或ハ瘢痕組織  
 肥厚シテ、時ヲリテ、硬結節トナリ、時ヲリテ、擡起



狀ヲナス、殊ニ火傷後ニ多シ、又或ハ惡性腫ノ占  
 居トナルコトアリ、例ハ、内皮癌腫ノ據點トナルカ  
 如シ、若、潰瘍ノ占位トナレハ、盡、潰瘍ニ變シテ、速  
 ニ彌蔓ス、是、血管匱乏シテ、營養不給スレハナリ、  
 一般ニ巨大ナル癥痕ノ、障碍ヲ起スハ、其收縮性  
 ニ因スレトモ、或ハ收縮性ヲ以テ、便利トスルコ  
 トアリ、是、特、眼瞼内翻ノ、施術ニ在リ、又、醜膿後ニ、治  
 癒セル傷部ハ、常態組織ヲ生スルコト能ハス、例ハ、  
 皮膚ノ癥痕ハ、皮脂腺、毛根球、及、色素ヲ具ヘスシ  
 テ、常ニ白色ナリ、粘膜ノ癥痕モ亦粘液腺ヲ缺ク

カ如シ、膿瘍ノ治癒ハ、少シモ外傷醜膿後ノ癒法  
 ニ異ナラス、膿瘍先、破潰シテ、膿汁ヲ漏出シ、壁面  
 ニ肉芽ヲ發生シ、其結締織ニ化シテ、收縮スルヲ  
 以テ、終ニ收閉シテ治ス、**乙**結締織肥大ハ諸部ノ  
 腺組織ニ發スレド、殊ニ多キハ、肺、肝、脾、腎、水脈腺、  
 及、皮下蜂窩織等ナリ、爰ニ一例ヲ舉ケテ、其變化  
 ヲ詳説セシ、肝臟、一因ニ由リテ、初メ充血ヲ起シ、  
 細葉間ノ結締織中ニ白血球及、遊離ノセル核ヲ  
 滲漏シテ、之ヲ充填スル片ハ、此白血球、忽、圓形ヲ  
 失ヒテ延長シ、結締織セルニ化シテ、細葉間ノ結



締織ヲ増加ス、故ニ肝體ハ盛ニ增大スト雖、彼ノ  
 新生結締織ハ、次テ收縮スルヲ恰、瘢痕組織ノ如  
 ク、肝體縮小シテ、堅硬灰白色トナル、是、肝セル、壓  
 迫ノ為、ニ萎縮シテ、葉間ノ脉管モ亦壓搾ヲ受ク、  
 故ニ門脉幹、及其枝末ニ虚性充血ヲ起シテ、遂ニ  
 腹水ヲ醸ス、之ヲ**肝臟硬變**ト稱ス、他腺ニ於テモ  
 亦其結締織、肥大スルハ、收縮ニ由リテ、腺組織  
 ヲ壓迫シテ、萎縮セシメ、脉管ヲ壓搾シテ、血行ヲ  
 障碍スルヲ、上ニ異ナラス、又慢性心病ニ於テ、肝  
 肺、脾、腎、腺等、同時ニ虚性充血ヲ發シ、硬變スルヲ

アリ、是慢性充血ノ、所為ニ他ナラス、其他皮下蜂  
 窩織ノ、肥大硬變ハ、專、經久膿瘍、或ハ痿管ノ、周邊  
 ニ生シ、硬結シテ、殆、軟骨組織ノ如シ、或ハ皮膚ノ  
 慢性潰瘍ニ然ルヲアリ、例、ハ、全脚ノ潰瘍癒テ後、  
 皮下組織盡、硬變シテ、筵膜ニ密著シ、以テ皮膚ノ  
 動搖ヲ妨碍スルカ如シ、**丙**偽膜結締織ハ、登膜炎  
 ニ於テ、新ニ結締織ヲ生シ、膜上ニ偽膜ヲ形成ス  
 ルヲ謂フ、或ハ細小ニシテ、糸狀ナル者アリ、或ハ  
 稍大ニシテ、索狀ナル者アリ、又或ハ真ニ膜狀ナ  
 ル者アリ、爰ニ胸膜炎ヲ一例トシテ、其景況ヲ細



述セシ胸膜炎ヲ起スルハ、膜面ノ内皮剥離シテ、一時ニ澄液及白血球ヲ漏泄シ、澄液ハ下流シテ、胸腔ノ下部ニ潑溜シ、白血球ハ胸壁ニ附著シテ、肉芽ヲ形成シ、遂ニ結締織トナル、故ニ其炎消散シテ後、胸膜多少肥厚シテ、其面滑澤ナラス、粗糲トナルヲ以テ、癒後膜面相摩軋シテ、特異ノ音ヲ發ス、是唯胸膜ノ隻層發炎スル片ニ在リ、然レモ、多クハ對向ノ兩層共ニ炎ニ罹リ、肉芽ヲ生シテ、接合シ、一層ノ肉芽ノ細脉、他層ノ者ニ吻合シテ、遂ニ癒著ス、此症ノ如此癒著シ易キハ、患者劇痛

ノ為ニ深呼吸ヲナスル能ハスシテ、雙層ノ胸膜互ニ運動摩擦スルコト少ナケレハナリ、其炎消散シテ後ハ、更ニ膜面ノ摩擦動搖スルヲ以テ、二層ヲ連接セル結締織ヲ緊張シ、遂ニ延長シテ、糸索状ヲナス者アリ、或ハ又膜状ニシテ、變形セリル者アリ、然ル中ハ、二層ノ胸膜癒著シテ、恰胸腔ナト者ノ如シ、隨テ肺ノ橐籥モ亦自ラ妨礙セラレ、如此結締織ノ種々ノ形狀ヲナス者ヲ概シテ偽膜ト云フ、炎後ニ生スル者ハ、他ノ澄膜ニ於ケル者モ亦同種ナリ、例ハ心囊炎ノ後ニ、心囊心ノ外



面ニ癒著シ、腹膜炎ノ後ニ腸ノ一部他部ト癒合シ、或ハ腹壁ニ癒合シ、次テ收縮スルニ隨ヒテ腸管ノ狹窄ヲ來スカ如シ、

第二、骨組織ノ新生ハ、殊ニ慢性骨炎ニ多シ、若シ一  
片ノ碎骨久シク骨體中ニ在ルキハ、近傍ノ骨組織、炎ヲ發シ、肥大シテ、緻密質ニ變シ、遂ニ海綿樣質モ亦盡、化シテ、緻密トナル、而シテ骨面新ニ不整ノ骨組織ヲ生シテ、漸々肥大ス、殊ニ甚シキ者ハ、常態ニ三倍ス、此變化ハ、總テ骨ノ傷害ヲ蒙ルニ由リテ起ル例ハ、梅毒性、或ハ癌腫性骨炎、或ハ

骨瘍挫骨等ニテ、必、近傍ニ肥大ヲ發スルカ如シ、發炎部ハ、多少其機能ノ障害ヲ起ス、或ハ唯、機能ノ減衰スルヲアリ、或ハ全ク遏絶スルヲアリ、例ハ、一腺、炎ニ罹リテ、其分泌全ク廢止シ、雙腎、急性炎ヲ發シテ、泌尿盡、遏絶ス、之ヲ尿缺ト云フ或ハ眼球ノ角膜炎ニ由リテ、其透明ヲ失ヒ、全ク視力ヲ妨碍スルカ如シ、或ハ機能ノ變常スルヲアリ、例ハ、腎炎ノ尿ニ蛋白質ヲ雜フルカ如シ、他腺ニ於テモ亦之ニ類似スル變常アリ、但、機能ノ變常ハ、大抵筋ノ反射運動ニ係ル、例ハ、眼球炎ハ、眼瞼ノ痙攣ヲ起シ、肺炎ハ、咳



嗽ヲ發シ、食喉炎ハ、嚥下運動ヲ生シ、膀胱炎ハ、膀胱  
 痙攣ヲ發シテ、止マサルカ如シ、又器械的源由  
 ニ基因スル者アリ、乃チ粘膜炎腫起シテ、狹小ナル管  
 ヲ閉塞ス、例ハ、嬰兒ノ鼻腔粘膜炎腫脹スレハ、哺乳  
 ニ方リテ、呼吸困難ヲ起シ、尿道粘膜炎腫脹スレハ、  
 泌尿澀滯スルカ如シ、或ハ炎産物ノ滲出ノ滲液、  
 臟器ノ腔内ヲ充填スルニ由ルアリ、例ハ、肺炎  
 ニ於テ、纖維素血球粘液、及内被セル等ノ、氣胞ヲ充  
 填シテ、肺質ヲ堅實ナラシメ、為ニ呼吸ヲ妨碍ス  
 ルカ如シ、又近接器械ノ、發炎ニ由ルアリ、例ハ、

胸膜炎ノ滲液、肋間筋ニ滲透シテ、多少其筋ヲ  
 麻痺セシメ、或ハ心囊炎ノ、心ノ筋肉ヲ麻痺セシ  
 ムルカ如シ、總テ須要ノ器械、發炎スルキハ、機能  
 ヲ障害スルヲ、強大ニシテ、危篤ナリ、例ハ、腦、肺、腎  
 氣喉ノ如キ、貴要ノ部、炎ニ罹ルキハ、數時ニシテ、  
 失命スルヲアルカ如シ、然レバ、骨骸、關節ノ如キ  
 ハ、然ラス、  
 以上論述セル諸件ハ、皆炎ノ為ニ起レル局處ノ  
 徵候ナリ、

汎發症候

ハ、血液ノ變調、及、熱度ノ昇騰、是ナリ、然



レ、輕易ノ炎ハ、全ク此ニ至ラサルトアリ、劇炎  
 ハ、必、血中ノ纖維素增量ス、乃、胸膜炎ノ患者ニ瀉血  
 ヲ施シテ、其血液ヲ取り、器内ニ放置シテ、凝結セ  
 シムレハ、表面ニ一層ノ膜ヲ生ス、此膜ハ、帶黃白  
 色ニシテ、厚薄常ニ一ナラス、赤血球ヲ混セス、單  
 ニ凝固セル纖維素ヨリナリテ、些少ノ澄液ト、白血  
 球トヲ雜フ、之ヲ**焮皮**或ハ**胸膜炎皮**ト云フ、許多  
 ノ炎性病ニモ亦之ヲ見ルトアレバ、殊ニ胸部ノ  
 器械ニ炎ヲ發シテ、呼吸困難ヲ併發スル者ニ多  
 シ、例、ハ、胸膜炎、肺炎、或ハ心炎ニ於ケルカ如シ、其

然ル所以ノ者ハ、炎ノ呼吸機ヲ妨碍スルニ由リ、  
 血中炭酸ノ量、炭酸ハ、血液ノ凝結ヲ妨碍スル性ヲ具ス常ニ超エテ、  
 血液ノ凝結、多少怠慢シ、赤血球ノ器底ニ沉澱ス  
 ル暇アルヲ以テ、血液凝固ノ後、外表ノ一層、盡、赤  
 血球ヲ失ヒ、唯、纖維素ヲ貽セハナリ、故ニ凝血面ニ  
 彼ノ焮皮ヲ結成スルトモ、必、血中纖維素ノ增量ヲ  
 徴ス可キニ非ス、古人ハ、彼ノ焮皮ヲ見テ、血中纖  
 維素ノ量増加シテ、發炎素因ヲ具フル徴トシ、纖維  
 ヲ減損センカ為、ニ屢瀉血ヲ施シタレバ、實ハ然  
 ルニ非ス、真ニ血中纖維素ノ多量ヲ的知ス可キハ、



凝固セル血塊ノ緻密堅剛ニ在リ、此血塊ハ、水脉ニ富メル部分ノ、炎ニ罹レル時、之ヲ見ル例ハ、關節炎、傳麻質私性皮膚炎、及皮下蜂窩織炎等ニ於ケルカ如シ、又水脉腺炎ノ為ニ腫脹スル片ハ、殊ニ然リ、例ハ、皮膚ノ羅斯性炎ニ於ケルカ如シ、之ニ反シテ、劇炎ヲ發ストモ、其器、水脉ニ富マサレハ、更ニ織素ノ增量スルヲ見ス、例ハ、腦炎ニ於ケルカ如シ、又手腕ノ創傷モ、水脉腺腫起セサル片ハ、織素ノ量ヲ増サス、此ヲ以テ看レハ、織素ノ增量ハ、發炎部ノ水脉、及水脉腺ノ刺衝ニ由ルト必セリ、

故ニ古人ノ説ハ、誤ニテ、血中織素ノ增量ハ、果シテ炎ヲ誘起スル源ニ非ス、却テ炎ノ成効ト謂フ可シ、水脉腺中織素ヲ刺戟スルニ由リ、水脉及、其水脉、及含有セル織素ヲ流出シテ、血中ニ注入センハ、メ、由ルニ他ナラス、試ニ動物ノ血中ニ織素ニ富メル證、液ヲ注射スルモ、炎ヲ起サス、古人、織素ノ多ク積、炎ヲ誘起スルヲ、乃、關節、傳麻質、斯ハ、織素ノ多ク、關節ニ堆積スルヲ、以テ、發炎ノ發シ、スルトシ、之ヲ融解セシ、カ、為ニ、多ク、硝酸、剥多、私ヲ用ヒタシ、之ヲ用フルモ、効ナシ、余カ、經驗ニ據レハ、之、織素ノ增量ハ、又白血球ノ量ヲ増ス、是亦水脉、及水脉腺ノ刺衝セラル、ニ因ス、又炎ノ、諸腺分泌ノ機能ヲ變常スル片ハ、血液ノ調和ヲ變達ス可シ、例ハ、



肺炎ハ、血中ノ酸素減少シテ、炭酸增量シ、肝炎ハ、胆汁血液ニ雜ハリ、又腎炎ハ、尿ノ分泌減少シテ、尿毒症ヲ起スカ如シ、尿毒症トハ、尿素血中ニ蓄積シテ、血液ヲ害スルノ毒ナリ、然レバ、試ニ犬ノ雙腎ヲ切除スルハ、忽チ尿毒症ヲ發スレトモ、血中更ニ尿素ノ増量ヲ見ス、此ヲ以テ看レハ、尿素ノ真ニ血液ヲ害スルカ、未ダ的知ス可カラス、唯、尿成分ノ血液ヲ害スルハ、發症モホ未確定スルヲ能ハス、又炎ノ產物ヲ吸收スルニ由リテ、血液ヲ變調スルヲアリ、殊ニ炎ノ產物ヲ排泄スルヲ能ハサルハ、在リトス、然ルハ、其產物血中ニ入り、血液ヲ害シテ、**炎性熱**ヲ發ス、**創傷熱**ト云フ、**創傷**然レバ、若、其產物皆此熱ヲ起セハ、ナリ

容易ニ驅逐セラレ、片ハ、熱ヲ發スルヲナシ、或ハ發スルモ、甚、輕微ナリ、例ハ、粘膜炎肺加ハ、其滲泄物、容易ニ排除ス可キヲ以テ、發熱セサルカ如シ、之ニ反シテ、其產物、排泄シ難クシテ、血中ニ吸收セラル、片ハ、劇熱ヲ起ス、例ハ、水脈ニ富ムル登膜ノ、發炎スル片膜ノ如シ、夫ノ動物ノ創傷ヲ蒙リ、其組織ノ變化、旺盛シテ、熱度ノ昇騰スル景況、之ヲ**創傷熱**ト稱ス、此時ニ方リテ、身體ノ重量、暫時ニ減少ス、以テ組織ノ消耗ヲ徵スルニ足レリ、又如此發熱スル者ハ、廢耗ノ組織、血中ニ吸



收セラレテ、酸酵素トナリ、血液ヲ毒シテ、神経系  
 統ヲ侵襲スレハナリ、今其症候ノ最要ナル者ヲ  
 掲載セシ、創傷ニ罹リテ後、速ニ身體衰憊シ、脈動  
 數弱ニシテ、體温下降ス、多量亡血ノ後ハ、殊ニ然  
 リトス、然シテ、二十四時ヲ經レハ、反對ノ症狀ヲ  
 發顯シ、患者衰弱不安ヲ覺ヘテ、戰慄シ、脈搏強數  
 ニ變シ、皮膚乾燥シ、其動脈血減少シ、靜脈血增加  
 シテ、多少肌面ニ藍色ヲ呈シ、皮筋收縮シテ皮膚  
 ノ乳嘴突起シ、皮膚粟起、次テ漸々弛緩シテ、動脈  
 血增量シ、全體ノ肌表、盛ニ熱シ、顔面潮紅シテ、脈

搏多クハ強數ナリ、且、水分多ク體中ニ滯溜シテ、  
 種々ノ排泄減少シ、肌膚及粘膜乾燥シテ、渴ヲ發  
 シ、泌尿減少シテ、尿色茶褐ニ變シ、患者甚苦煩ヲ  
 覺ヘ、多クハ、脛ニ充血シテ、譫語ヲ發ス、其後熱度、  
 漸次ニ減退シ、皮膚滋潤シ、大ニ發汗シテ、多量ノ  
 尿ヲ漏泄シ、此尿ハ、多量ノ尿素、尿酸、及鹽類ヲ含メリ、遂ニ熱微消散  
 ス、但、暫時ノ後、復戰慄シテ、前症再發スレトモ、初  
 ノ如ク劇シカラズ、屢、反復スレハ、漸次ニ輕易ト  
 ナリ、若、適宜ニ化膿スレハ、熱全ク止ム、然レモ、常  
 ニ體重甚減シ、カ故ニ、全ク恢復スルニハ、必



許多ノ時間ヲ要ス、毒物血中ニ入ルキハ、戰慄ヲ起ス、或ハ輕クシテ、唯、背部ニ微冷ヲ感覺スルヲアリ、其劇シキ者ハ、四肢厥冷シテ、藍色ヲ現シ、隨意筋慢性收縮<sup>痙攣</sup>ヲ發シテ、臥床ヲ搖動シ、牙關緊急シ、皮膚粟起シテ、肌毛直立スルニ至ル之ヲ熱ノ憎寒期ト為ス、此期ニ方リテ、内部ノ熱度モ亦實ニ下降スルヲアレトモ、極メテ稀ナリ、例ハ、惡膿毒ノ劇症ハ、惡寒期ノ際、内部ノ熱度減少シ、持續シテ變ヒス、遂ニ命ヲ失フカ如シ、又人工ニ於テモ能ク熱度ヲ下降ス可シ、乃、腐敗膿、牛酪酸、或

ハ炭酸安母尼並テ動物ノ血中ニ注入スルキハ、熱度下降シテ、憎寒ノ際、體重著シク減却ス、但、多クハ、體内ノ熱度昇騰シテ、下降ヒス、然ルニ尚、憎寒スル者ハ、内器ト肌表トニ於ル血液ノ分配、均一ナラサレハナリ、是、皮筋及、皮膚ノ脉管ニ分布セル神經ノ中心、血液ニ刺衝セラレテ、反射運動ヲ發シ、皮筋及、脉管ノ筋層ニ、痙攣性收縮ヲ起シ、テ、皮膚ノ血液ヲ内部ニ驅逐シ、貧血スルヲ以テ、體温ハ增加スレトモ、却テ憎寒ノ感ヲ生スルナリ、又他方ヲ以テ、同一ノ反射運動ヲ奮起ス可シ、



例ハ、カテートルヲ尿道ニ送入スルキニ、戰慄ス  
 ルコアルカ如シ、熱ノ最要ナル徵候ハ、温度ノ昇  
 騰ナリ、普ク人ノ知レルカ如ク、健人ノ體温ハ、殆  
 攝氏三十六度半、乃至三十八度ナリ、此、寒暑針ヲ  
 腋下ニ於テ測ル、此差異アル者ハ、組織變化ノ増減ニ由ル  
 ナリ、例ハ、過劇ノ動作、消化ノ際、及、營養機ノ旺盛  
 スル時ハ、半度乃至一度許ヲ増スカ如シ、而シテ  
 體內ノ温度ハ、常ニ外表ヨリ稍、高ク、肛門或ハ腔  
 内ニ寒暑針ヲ送入シテ、檢スレハ、凡、半度高クシ  
 テ三十七度、乃至三十八度半ナリ、又動物ノ門脉

血ヲ測ルニ、其熱度消化ノ際ニ在リテハ、三十九  
 度、十分度ノ七ニシテ、肝静脉ノ血温ハ、稍優リテ、  
 四十一度、十分度ノ三ナリ、是、消化ノ間ハ、肝臟ノ  
 官能、亢盛スルヲ以テナリ、凡、人身ノ熱度ハ、之ノ  
 腋下ニ於テ測リ、三十八度ヲ超ユルキハ、熱病ナ  
 リ、熱病ニ在リテハ、三十八度、乃至四十一度半ニ  
 達スルト雖、四十二度半ニ達スルハ、極メテ稀ナ  
 リ、凡、テ熱病ノ患者ハ、體温常ニ等一ナラス、暫留  
 熱ノ、日ニ變化アリテ、曉ニ下リテ、暮夜ニ昇ル、健  
 體ニ於テ然リトス、亦之ヲ熱ノ弛張ト云フ、泰衰度熱モ亦



日ニ弛張アリ、故ニ熱度平等ニシテ、弛張セサル者ハ稀ナリ、諸般ノ熱病ハ、唯、熱度ノ異同ヲ以テ、區別ス可シ、例ハ、間歇熱ハ、免熱期ニ熱度全ク平ニ復シ、弛張熱ハ、免熱期モ、體温尚少シク常ニ過クルカ如シ、

**發熱ノ理由** 熱度ノ昇騰ハ、組織變化ノ亢盛ニ由ル、疑ヲ容レズ、是、熱病後、體重ノ減却ト、燃燒產物ノ排泄増加トヲ以テ、徵知ス可シ、乃、尿中ノ尿素、尿酸、硫酸鹽、磷酸鹽、乳酸鹽、脲酸鹽等、皆増加シ、特ニ硫酸鹽ノ增量ハ、蛋白質ノ燃燒、旺盛ヲ徵シ、

磷酸鹽ハ、專、骨質ヨリ生スルモ、亦蛋白質ノ燃燒ニ由リテ生ス、磷ハ、骨質中ニ最多ク、又腦質、及神經組織中ニ存シテ、蛋白質ト化合ス、故ニ骨質、及、蛋白質ノ燃燒ヲ徵ス可シ、之ニ反シテ、尿中ノ食鹽ハ、其量ヲ減ス、是、患者ノ食餌、減スレハナリ、尿中食鹽ノ量ハ、常ニ食品含有ノ多寡ニ閉テ、又汗中ノ揮發性脂肪酸類、牛酪酸、琥珀酸、安母尼亞鹽類モ亦増加ス、又呼氣中ノ炭酸ノ量ハ、必、減少スルヲ常トス、凡テ熱病ハ、體中ノ燃燒機、旺盛スルヲ以テ、炭酸ノ量、増加ス可キカ如クナレトモ、其呼吸、甚、短速ニシテ、淺少ナルカ故ニ、吸入ノ酸素ヲ以テ組織ノ燃



燒ニ較ワレハ、少量ニシテ、盡、組織ヲ燃燒スルヲ、能ハサルナリ、若、組織、全ク燃燒スルハ、水ト炭酸トニ變スルトモ、然ラスシテ、或ハ、脂肪酸、乳酸等ニ化シテ、尿中ニ存シ、或ハ、脂肪酸ニ變シテ、汗中ニ存スルカ故ニ、呼氣ノ炭酸、減少スルナリ、總テ熱病ニ罹レル際ハ、組織ノ燃燒、甚、熾ナリ、健體ニ於テ、全身ヲ被包シ、劇シク動作ストモ、熱度ノ昇騰、纒ニ半度ヲ出テス、然レモ、熱病一於テハ、熱度ノ增加、大抵四度ニ達ス、以テ徵ス可シ、其燃燒ニ由リテ、消失スル組織ハ、第一脂肪組織ニシテ、其銷

耗最速ナリ、是、患者ノ、速ニ羸瘦スル所以ナリ、又創傷熱ノ如キ、炎性熱ハ、發炎部ノ組織ニ於テ、舊セル類廢シテ、新セル之ニ代ル、然クセルノ、類廢スル者ハ、熱ノ發生ニ由ルナリ、若、局部ノ熱勢、熾ナレハ、他部ニ波及シテ、全身熱ヲ發ス、又、許多ノ熱性病ニテ、器械ニ炎ヲ發セストモ、劇シキ組織變化ヲ徵知ス可キナリ、例ハ、室枝私ノ、隨意筋、脂肪變性ヲ起シテ、無數ノ核ヲ充填スルカ如シ、又熱病ノ際、血液成分モ亦變性シ、纖維素ハ、其量ヲ増シ、水分鹽類モ亦組織ヨリ血中ニ吸收セラレ



テ多量トナリ、赤血球ハ、一分類廢シテ、色素多ク  
 尿中ニ存シ、白血球ノ増加スルヲ見ル、其他蛋白  
 質ハ、酸化シテ、一半ハ纖維素ニ化シ、一半ハ尿素ト、  
 尿酸トニ變ス、此ヲ以テ看レハ、熱病ノ熱度ノ昇  
 騰ハ、組織變化ノ旺盛ヲ以テ、全ク説明スルニ足  
 レリ、右ノ組織銷耗ハ、實ニ全ク飲食ヲ止ムル片  
 ヲリモ甚シ、夫ノ銷耗熱ノ患者、飲食異常ナキモ、  
 尚、逐日羸瘦スルヲ、常ニ實驗スルカ如シ、發汗ノ  
 減少モ亦熱度ノ増加ヲ助ク、是、汗ノ蒸發、減少ス  
 ルハ、熱ノ消散ヲ促スヲ少ナクシレハナリ、

熱ノ為ニ發現スル種々ノ症候ハ、皆熱度ノ劇烈  
 ナルニ由ル、例ハ、過度ノ蒸發ニ由リ、粘膜乾燥シ  
 テ、渴ヲ發シ、然リ或ハ神經諸症、即チ心煩、頭痛等  
 ヲ起スカ如シ、脉搏ノ頻數ニ變スルハ、乃チ迷走神  
 經ノ一部、麻痺シテ、心ノ縮張、疾速ナルヲ以テト  
 リ、如此神經ノ感應ヲ減殺スルハ、劇烈ナル熱勢  
 ト、血中酸素ノ乏少トニ由ル、例ハ、筋ノ運動、過度  
 ナレハ、血中多ク炭酸ヲ含ミテ、心動疾速ナルカ  
 如シ、彼ノ脉搏ト、熱度トハ、大抵平衡シ、脉搏頻數  
 ナレハ、熱度隨テ昇騰ス、通常熱度ノ昇騰ハ、脉搏



ノ類數ニ稍後ル、者ナリ、然レモ、必、皆平衡スル  
 二非ス、例ハ、窒杖私ノ初期ハ、熱四十一度攝氏ニシ  
 テ、脈九十至一分時間ナル者アリ、或ハ之ニ反シテ、死  
 前ニ脈搏頻數ニシテ、百六十至ニ達スルモ、熱度  
 ハ下降シテ、三十五度ナルカ如シ、故ニ熱病ノ診  
 斷ハ、常ニ脈搏ヨリ熱度ヲ以テスルヲ優レリト  
 ス、創傷熱ノ因ハ、毒物ヲ血中ニ吸收スルニ在ル  
 一、疑ヲ容レズ、試ニ其血液ヲ取リテ、動物ノ血中  
 ニ注入スレハ、忽、創傷熱ヲ發ス、然レモ、健康血液  
 ヲ以テ之ニ代レハ、更ニ熱ヲ起スコトナシ、以テ證

ス可シ、熱ノ末期ニ至レハ、血中ヨリ毒物ヲ驅逐  
 シ、分泌物ニ雜ヘテ、體外ニ排泄ス、或ハ尿ト汗ト  
 ニ混シ、或ハ劇シキ下利ヲ發シテ、之ヲ驅除ス、此  
 排泄物ハ、毒物ヲ擯斥スルヲ以テ、之ヲ分利性排  
 泄物ト稱ス、創傷一回化膿スレハ、膿汁ノ排泄、自  
 在ナルヲ以テ、其熱消散スレトモ、治癒ニ趣ク際  
 膿汁、若、組織中ニ壅塞シテ、血中ニ吸收セラル、  
 其ハ、再發熱スルコトアリ、例ハ、瘻管孔ノ速ニ閉塞  
 シテ、膿汁ノ漏出ヲ遏止シ、或ハ瘻縁内陷シテ、膿  
 汁ノ排泄ヲ妨碍スルモノ如シ、如此化膿後ニ再



發スル熱ヲ第二發熱ト云フ、總テ巨大ナル器臟ノ、發炎スルキハ、熱ヲ起ス、例ハ、肺臟、胸膜、腹膜ノ發炎ノ如シ、之ヲ**炎性熱**ト稱ス、此亦創傷熱ト、一理ニシテ、血中ニ膿ヲ吸收シテ發スルナリ、試ニ發炎セル器臟ヨリ澄液ヲ搾出シ、數回瀘過シテ、純潔ナラシメ、エシホルノ發生ヲ防禦セシカ為ナリ動物ノ血中ニ注射スレハ、忽、同種ノ熱ヲ發ス、或ハ發炎部ノ血液、若ハ膿汁ヲ取りテ、動物ノ血中ニ注入スルモ亦然リ、一説ニ、件ノ動物發熱スル者ハ、注射ノ為ニ造レル新創ノ刺衝ニ由ルトスレトモ、果シテ然

ラハ、二十四時ノ後ニ發ス可シ、然ルニ、毒血注入後、忽、熱度昇騰シテ、最高點ニ達スルナリ、若、健康血液、或ハ淨水ヲ注入スレハ、速ニ發熱セス、必、多少時間ヲ經テ、創傷熱ヲ起ス、故ニ件ノ發熱ハ、果シテ毒物ノ所為ニシテ、新創ノ為ニ非ルヲ、瞭然タリ、炎性熱ノ學說ハ、古今同シカラス、古人ハ、血液先、損害ヲ蒙リ、炎性トナリテ、器械ニ發炎スト云ヒシカ、輒今ハ、之ニ反シテ、器械先、發炎シ、次テ血液ヲ損害シテ、全身熱ヲ起ストセリ、夫ノ猩紅熱、痘瘡、麻疹、室枝私等ノ、熱ヲ發スルモ亦外來ノ



毒物、血中ニ入りテ、之ヲ毒害スルニ由ル、今試ニ、  
痘瘡ヲ擧ケテ、之ヲ論セン、痘瘡ハ、初期三日間、毒  
物ノ為、ニ劇熱ヲ起シ、通常第三、第四日ニシテ、肌  
表及、粘膜面ニ無數ノ細瘡ヲ生シテ、熱徹殆、消散  
ス、是、血中ノ毒物、發瘡ノ為、ニ擯斥セラレ、ニ由  
ルナリ、次テ三四日、初起ヨリ九、七八日ニ至レハ、  
各瘡醸膿シテ、小膿瘍ニ變シ、膿汁、血中ニ吸收セ  
ラレテ、再、發熱ス、然シテ瘡中ニ膿汁ヲ孕メル際  
ハ、熱度甚、高シ、蓋、序熱ハ、毒物ヨリ起リ、再發スル  
熱ハ、膿汁ノ為、ナリ、次テ瘡面結痂スレハ、熱候速

ニ消褪ス、此痂皮ハ、膿汁ノ乾燥シテ、凝著スル者  
ニシテ、之ヲ搔破スレハ、出血シ、其血液凝固シテ、  
痂皮ニ赤色ヲ染與ス、其他泥沼毒、即、間歇熱ノ如  
キモ亦外來毒物ノ、血液ヲ損害スルニ由ル、而シ  
テ血液、毒セラレハ、必、熱ヲ發シ、其熱、能ク血中  
ノ毒物ヲ擯斥シテ、熱候消散スルモ、更ニ毒物ヲ  
吸收シテ、漸、血中ニ鬱積スレハ、再、熱ヲ起シテ、毒  
物ヲ驅逐ス、以テ熱ノ間歇、整然タル所以ヲ察ス  
可シ、諸般ノ熱病ハ、其熱ノ經過ニ因リテ區別ス  
甲、稽留熱ハ、熱度常ニ高クシテ、唯、朝ニ稍減シ、暮



ニ少シク増スノミ、例ハ、室扶私ノ如シ、**乙**弛張熱ハ、其熱強劇ナルモ、曉天ニハ、大ニ下降シ、暮夜ニ至レハ、著ク昇騰シ、午前第二時ニ最低下ス、然レ凡、生平ノ熱度ニ降ラス、其熱度ノ最高キハ、午後八九時ノ間ナリ、例ハ、創傷熱、消耗熱ノ如シ、持ニ消耗熱ハ、肺勞、癰腫、病院壞疽等ノ末期ニ發シ、良博極度ニ至レハ、燃燒ス可キ組織、乏少ニシテ、免熱期ハ、熱度下降シ、生平ノ熱度ニ及ハサルニアリ、**丙**間歇熱ハ、其免熱時ハ、熱度下降シテ、平主ニ等ニ日發スル者アリ、一日ヲ隔ツル者アリ、或ハ

二三日ヲ間スル者アリ、故ニ日發熱、隔日熱、三日熱等ノ區別アリ、

炎ノ轉歸ハ、三様アリ、

**第一**全治ハ、痕跡ヲ貽サス、之ヲ**分解**ト云フ、時期ニ關セス、全ク治癒スルニアリ、或ハ満期

ニ癒エ、或ハ既ニ膿球滲出期ニ至ルモ、尚能ク治ス、先、痛楚休止シ、腫脹減少シテ、終ニ滲泄物、吸收セラレ

**第二**癒後多少炎部ニ障碍ヲ貽ス、例ハ、膜面ニ假膜ヲ貽シ、或ハ癍痕ヲ貽シ、或ハ心炎後ニ瓣膜ノ



虧損ヲ生シ、或ハ骨炎後ニ、骨質肥大ヲ起スル如シ、

第三壞死、局處ニ止ルヲアリ、或ハ身命ヲ害スル

ヲアリ、局部分壞死ハ、四種アリ、甲局部分乾枯ハ、

其液分吸收セラレ、固形分乾燥シテ、組織中ニ留

リ、或ハ石灰ニ變性ス、炎ノ産物、即膿球ハ、乾酪變

性ヲ受ケ、組織モ亦多少乾酪變性ス、例ハ、肺臟腎

臟、水脈腺ノ如キ諸腺、發炎後ニ枯死スルカ如シ、

然ルレバ、腺内異物ヲ保ツニ異ナラス、又炎ヲ起

サス、唯此變化ヲ受ケテ、局部分枯死スルヲアリ、例

ハ、子宮外妊娠ノ胎兒、終ニ枯死ス、或ハ石灰變性

シテ、之ヲ石見結締織ノ外膜、之ヲ被包スルカ如

シ、體內寄生動物モ亦然ルヲアリ、例ハ、元ニア、エ

キノコク、ヒダ、ヒリキナ、ス、ハイ、リ、ス、ニ

於ケルカ、如シ、此石灰質沉着ハ、先、外表ニ於テシ、

漸次内部ニ及ブ、故ニ其質、内外同シカラリルヲ

アリ、此ニ由リテ觀レバ、石灰變性ハ、必、炎後ニ發

スルニ非ルヲ明ナリ、乙木乃伊狀變性ハ、乾

壞疽ト稱ス、局部分乾燥收縮シテ、黑色ノ硬塊トナ

ルナリ、例ハ、股動脈閉塞後ニ、趾脛ノ黑色ヲ呈シ



テ硬化スルカ如シ、是尋常創傷ノ、黒色ニ化スル  
 ト異ニシテ、惡臭ヲ放タス、腐敗セスシテ、永久ニ  
 存ス、且體ノ深部ニ發セス、血管乏少ナル外表部  
 ニ在リ、例ハ、皮膚ニ發スルカ如シ、**丙**組織ノ軟化  
 ハ、腐敗ト異ナリ、殊ニ腦ニ多シ、若其動脈トロン  
 ボシス、或ハエンボムニ罹リ、卒中ヲ發シテ後ハ、  
 腦質ノ一分、白色細微ノ顆粒狀物ニ變シ、甚柔軟  
 ニシテ、僅ニ抵觸スルモ、忽摧碎ス可シ、顯微鏡ニ  
 テ檢スレハ、唯脂肪顆粒ヲ見ルノミ、他ノ組織ヲ  
 雜ヘス、之ヲ腦ノ白色軟化トス、又赤色軟化アリ、

乃、溢血ノ滲透ニ由ル、此軟化ハ、前ニ論セルト口  
 ンボスノ軟化ト異ナラス、癌腫結核ノ軟化モ亦  
 然リ、故ニ贅舉セス、**丁**組織ノ腐敗ハ、常ニ多シ、一  
 ニ壞疽ト稱ス組織ノ變化過絶シ、局處ニ水分ヲ  
 保チテ、乾燥セサル片ニ發ス、初メ充血期ニ血液  
 盛ニ灌溉シテ、更ニ多量ヲ含メハ、腐敗殊ニ速ナ  
 リ、故ニ組織ノ柔軟ニシテ、液分ニ富メル者ハ皆  
 然リ、炎部ノ血液、先腐敗シ、脂肪組織、腺組織、筋組  
 織、神經組織、之ニ次キ、結締織、軟骨組織ハ、又之ニ  
 次キ、而シテ角質、毛髮、爪、甲、彈性組織、動脈、氣管、及



ヒ、齒ト骨質トノ如キハ、最後ニ在リトス組織ノ  
腐敗變化ハ、組織彈力ヲ失ヒ、柔軟ナルヲ恰糊泥  
ノ如ク、血液分解シ、赤血球分裂シテ、細分子トナ  
リ、色素及ヒ水分ハ、組織ニ滲潤シテ、藍色、或ハ黒色  
ヲ呈ス、是、血中ノ鉄分、組織中ノ硫黄ニ化合シテ、  
硫化鉄ヲ形ツクルヲ以テナリ、其水分ハ、終ニ表  
部ニ滲出シ、皮下ニ鬱積シテ、水泡ヲ生ス、泡内、帶  
赤黄色ノ稀液ヲ孕ミ、惡臭ヲ放チテ、多少柔軟ト  
ナリ、漸次ニ分離脱落シテ、常ニ茶褐色ノ液ヲ漏  
出ス、之ヲ「サニースト」云フ、水分、腐敗ノ血液、脂肪

蛋白質ノ顆粒、分解セル組織ノ細分子ヲ含ム、其  
壞死組織ヲ取り、顯微鏡下ニ照看スレハ、蛋白質、  
脂肪、色素ノ細粒、及ヒ滴狀ノ脂肪アリ、其他「コレス  
テ」アリ、鹽化「<sup>食</sup>」<sub>鹽</sub>三鹽基磷酸鹽等ノ結晶  
ト、細小ノ動物、及ヒ植物セルヲ見ル、○壞疽ノ原因  
ハ、之ヲ二様ニ分ツ、血行遏止ト、組織源分ノ類廢  
ト是ナリ、天、血行遏止ハ、トロンボス或ハ「エンボ  
ス」ノ、動脈ヲ閉塞スルニ由リ、又經久縮帶ノ壓迫  
或ハ大腫瘍ノ壓迫ニテ、血行ヲ遏絶スルニ由リ、  
皮膚壞疽ニ陥ル、又膿汁血液ノ滲漏シテ、血行ヲ



妨碍スルコアリ例ハ骨膜炎ニテ膜下ニ膿汁或ハ血液ヲ滲漏シ骨質ヨリ全ク膜ヲ剝離シテ骨質滋養ヲ資ルコ能ハス腐敗スルカ如シ又滲出セル纖維素組織ニ竄透シテ起スコアリ例ハ粘膜實布的利質私ニ由リテ壊死スルカ如シ膿汁モ亦然ルコアリ例之ハ膿汁皮下組織ニ滲潤シテ皮膚ヲ頽廢スルカ如シ又心ノ收縮力減衰シテ血行澁滯スルニ由ル例ハ老人壞疽ノ血管末梢ノ循環殆廢絶シテ發スルカ如シ殊ニ手指足趾ニ多シ又髮細管ノ血行渾渾ニ由ルコアリ例之

ハ劇寒強熱ノ為ニ血液凝結シテ炎性壞疽ニ陷カ如シ又神經ノ感動<sup>痙攣性</sup>動脈管ヲ閉塞スルコアリ又シケレハ遂ニ局部ヲ壊死セシメテ各側ノ同部ニ壞疽ヲ起スコアリ之ヲ名ツケテシメトリカ<sup>ル</sup>壞疽ト云フ例ハ雙手ノ同指頭兩脚ノ同處左右ノ耳垂ニ發スルカ如シ其發スル時局部ニ死瘳ノ感アリテ貧血ヲ起シ蒼白色ヲ呈シ忽<sup>チ</sup>恢復ストモ屢再發ス之ニ先タチテ心<sup>痙攣性</sup>收縮ヲ起シ胸部ニ壓迫ヲ覺ユルコト頻々反復シテ遂ニ壞疽ヲ生ス是心ノ痙攣<sup>性</sup>脈管ニ波及シ



巨大ノ動脈ハ、全ク閉塞セサレトモ、細脈ハ、已ニ閉塞スルヲ以テ、然ルナラン、地、組織源分ノ頽廢ハ、剝傷、挫傷ニ於テ、屢、看ル所ニシテ、或ハ化學的物、品、即、苛性加里ノ如キ者ニ由ルヲアリ、或ハ腐敗セル尿ニ由ルヲアリ、例之ハ、尿瘻ノ、多ク組織ヲ頽廢セシムルカ如シ、又或ハ毒物ニ由ルヲアリ、例之ハ、水銀ノ誤用ニ由リテ流延シ、齒齦ノ粘膜、遂ニ壞疽ニ陥リ、蝮蛇咬傷、或ハ麥奴ノ毒ニ由リテ、壞疽ヲ發スルカ如シ、又、壞疽ハ、常ニ散在性ナレトモ、時ニ流行スルヲアリ、例ハ、實布の利性

壞疽ノ如シ、或ハ地方病トナルヲアリ、例ハ、病院壞疽ノ如シ、壞疽部ハ、官能全ク廢絶シ、知覺失亡スレモ、近傍ノ組織ハ、發炎シテ、劇痛ヲ起ス、例ハ、老人壞疽ノ如シ、又其周邊ニ浮腫ヲ發セシムルヲ常トシ、局發壞疽ノ、全身ヲ感動スル者ハ、第一、壞疽ノ形狀ニ關ス、乾壞疽ハ、濕壞疽ニ較スレハ、感動甚、輕ク、壞死部、若、細小ニシテ乾燥シ、胞ニ被覆セラレハ、殆、全身ヲ感動スルヲナシ、第二、地位ノ異同ニ係ル、例之ハ、腦ノ一部ニ在レハ、多少麻痺ヲ發シ、肺ノ局處、壞死スレハ、咯血ヲ起シ、呼

原病學通論 卷之六 三十一 三友會



氣惡臭ヲ帶フルカ如シ、此肺壞疽ノ殊ニ危険ナル者ハ、多クハ胸膜ニ波及シテ、之ヲ穿透スルヲ以テ、大氣、胸腔内ニ竄入シテ、急性胸膜炎ヲ發シ、遂ニ命ヲ失フニ至レハナリ、第三、壞疽ノ全身ヲ侵襲スルヲ、最劇シキ者、即濕壞疽ニシテ、壞死部ノ、生活部ニ接スルヲ、廣大ナレハ、殊ニ甚シ、是此兩部ノ間ニ液ノ交換スルニ由リテ、半ハ滲透シ、半ハ静脈、及水脈ノ吸收機ニ由ル、試ニ壞死部ニ沃化剥多私母ノ溶液ヲ注入スレハ、二三時ノ後、尿ニ雜リテ排泄ス、以テ徵ス可シ、故ニ如此腐敗

膿ヲ吸收スレハ、腐敗膿熱ノ諸症ヲ發シ、先、戰慄シテ、脈搏細數ニ變シ、下肢厥冷、舌上乾燥シ、多クハ、劇烈ノ吐瀉ト、尿閉トヲ起シ、譫語昏睡シ、遂ニ大ニ衰弱シテ死ス、體ノ熱度ハ、初メハ適宜ニ増加スレド、速ニ減少シテ、生平ノ熱度ニ復ス、壞疽ノ轉歸ハ、幸不幸アリ、幸ナル者ハ、死部ト、健部ト、全ノ分界スルナリ、先、動靜二脈ニ下ロシ、トシ、ヲ生シテ閉鎖シ、サニトスノ吸收ヲ防ギ、次テ死部ニ接スル健部ノ組織、刺戟セラレ、充血シテ、炎ヲ起シ、其接際ニ赤色ノ限界線ヲ生ス、此線ハ充



血化膿セル組織ヨリナリテ、壞疽部ヲ限界ス、故  
ニ壞疽ノ蔓延ヒサル確兆ナリ、次テ線中ニ一層  
ノ膿ヲ化生シ、漸々生死ノ二部ヲ分斷シ、先、壞疽  
ノ周圍ヲ分離シ、次テ中央ニ及フ、若、組織ノ分離、  
速ニシテ、生部ノ脉管未、全ク閉鎖ヒサルニ、死部  
剝離スルキハ、出血ヲ發ス、例ハ、泰斐度ニ於テ、廻  
腸ノ潰瘍ヨリ出血シテ、危篤ナルカ如シ、死部既  
ニ剝離スレハ、肉芽ヲ被覆スル尋常ノ創傷ニ異  
ナラス、又不幸ナル者ハ、限界線ヲ生ヒス、逐次ニ  
蔓延ス、之ヲ「瀰蔓壞疽」ト云フ、然ルキハ、生活部ノ

血管「トロンボス」ヲ生セスシテ、閉鎖セサルヲ以  
テ、ザニ「トス」ヲ容易ニ吸收シ、腐敗膿熱ヲ發シテ  
死ス、或ハ大血管破裂シテ、大ニ出血シ、斃ル、  
アリ、例ハ、壞疽性ノ横痃、漸次ニ蔓延シ、股動脈破  
裂シテ、斃ル、カ如シ、或ハ器械ヲ穿通シテ、死ス  
ル「アリ、例之ハ、腸ノ壞疽性潰瘍、腹膜ヲ穿テ、  
含蓄物ヲ腹腔内ニ洩シ、為、ニ腹膜炎ヲ起シテ、失  
命スルカ如シ、胃粘膜ノ壞疽モ亦然ル「アリ、或  
ハ壞疽ノ近傍ニ炎ヲ發シテ、死スル「アリ、例之  
ハ、肺ノ壞疽性潰瘍ニ於テ、劇性胸膜炎ヲ起シテ



死スルカ如シ、

炎ノ種類 炎ハ尋常現發ノ症候ノ多少ニ關シテ、各其性ヲ異ニス、

第一、充血性炎ハ充血尋常ノ者ニ比スレハ劇シクシテ、焮赤腫起共ニ強シ、例ハ、粘膜炎、急性腎炎、眼珠結膜如シ、皮膚ノ急性炎、皮膚ノ如シ、羅畢丸及急性腎炎ノ如シ、

第二、滲泄性炎ハ多量ノ滲泄物ヲ生ス、其種類アリ、甲ハ、纖維ヲ滲泄スル炎ナリ、多ク澄膜ニ發ス、乙ハ、澄液ヲ滲出スル炎ニシテ、粘膜炎ニ多シ、例

之ハ、腸加答兒ニテ水瀉ヲ來スカ如シ、又澄膜ニ發スルヲアリ、甲種ニ比スレハ、稍緩ナリ、丙ハ、炎ノ義膜性滲出ヲ具フル者ナリ、丁ハ、膿汁ヲ滲出スル炎ニシテ、必膿ヲ釀生ス、粘膜炎、皮膚及澄膜ニ多シ、戊ハ、潰瘍ヲ具フル炎ナリ、例ハ、下疳及皮膚粘膜炎ニ生スル種々ノ潰瘍ノ如シ、

第三、組織新生炎ハ、必炎部ニ新組織ヲ發生ス、例之ハ、假膜ヲ生シ、或ハ器械ノ肥大ヲ發スルカ如シ、殊ニ創傷ノ癒合ニ方テハ、必新組織ヲ生スル者ナリ、



第四、組織變性炎ハ、局處ノ組織ヲ變性スル者ニシテ、許多ノ組織炎ニ之ヲ見ル例、ハ、腎及肝ノ炎ニ於テ、澄液滲泄ノ為ニ、マルビシ胞、及肝セル腫脹シ、遂ニ脂肪變性ヲ起スカ如シ、其他實布の利質私、及壞疽性炎モ亦組織變性スル者ナリ、發炎ノ因ニ關シテ、再ヒ炎ヲ區別スル左ノ如シ、

第一、創傷炎ハ、創傷、及異物ノ刺衝ニ由リテ起ル者是ナリ

第二、毒物炎ハ、毒物ノ為ニ發ス、例之ハ、水銀劑ノ口内粘膜炎ヲ起シ、或ハ猛烈利尿劑如キノ

腎、膀胱ニ發炎シ、又或ハ沃化劑多私母ニ由リテ、皮膚、及皮下蜂窩織ニ炎ヲ發シ、之ヲ長服スレハ、皮膚ニ細瘡ヲ生シテ、皮下蜂窩織ニ膿瘍ヲ發スルカ如シ、其他種々ノ腐蝕劑ヲ内服スルキハ、亦然リトス、

第三、惡液性炎ハ、血液調和ノ不良ニ因ス、例ハ、梅毒、或ハ腺病ノ、水脈腺ニ炎ヲ起スカ如シ、

第四、病毒轉移性炎ハ、エンボム、或ハ創傷ニ腐敗物ヲ吸收スルキニ發スルカ如キ者ニシテ、同時ニ諸器ヲ侵スヲ以テ徵知ス可シ、例之ハ、肺、肝、脾



腎等ノ、一時ニ侵襲セラレ、カ如シ、

第五、**偽麻質斯性炎**ハ、感冒ヨリ起ル、例ハ、急性肺  
炎、關節炎、或ハ許多ノ澄膜炎ノ如シ、

第六、**特異炎**ハ、特異ノ毒ニ因ス、例ハ、**梅毒、淋毒、麻疹、猩紅熱、痘瘡**ノ如シ、

第七、**沉墜性炎**ハ、體ノ下位ヲ占ムル部ニ虚性充  
血ヲ起スニ由ル、例ハ、老人ノ久シク仰臥スレハ、  
肺炎ヲ發スルカ如シ、此疾多クハ虚弱ナル者ニ  
發ス、是心ノ收縮力、劣弱ニシテ、血液ノ循環、不良  
ナルヲ以テ、血液自己ノ重力ニテ沉墜シテ、體ノ

下位ニ在ル部ニ鬱滯シ、澄液、脉外ニ滲漏シテ、組  
織ヲ竄透シ、以テ器械ノ官能ヲ撲滅ス、然レモ、真  
炎ニ非ス、唯、血液溜滞ニ由リテ起ルヲ以テ、充血  
及、澄液滲漏ヲ來スノミ、殊ニ肺、腎、腦等ニ發シテ  
急性浮腫ヲ起シ、或ハ皮膚ニ發シテ、壞疽ヲ生シ、  
大ニ蔓延スルヲアリ、  
其他炎ノ性ニ由リテ、虚實ノ二性ニ區別ス、  
**實性炎**一ニ急性ト稱ス、發炎部ニ、實性充血ヲ起  
シテ、熱度昇騰シ、脉搏強實トナリテ、血中纖維素増  
量スルヲ見ル、例之ハ、急性偽麻質私、急性肺炎、急



性胸膜炎、或ハ許多ノ創傷ニ於ルカ如シ、  
 虚性炎又慢性ト稱ス、經過ノ緩慢ナルヲ以テ、徵  
 知ス可シ、通常虚弱家ニ多ク、而シテ決シテ脉搏  
 ヲ侵サス、例ハ、氣管枝炎ニ於テ、脉搏異常ナキカ  
 如シ、熱勢甚、強カラス、或ハ稍、弛張スルヲアリ、或  
 ハ全ク弛張セサルヲアリ、例ハ、肺勞、慢性肺炎、胸  
 膜炎ノ如シ、總テ澄膜慢性炎ハ、唯、澄液ヲ滲出ス、  
 其量、或ハ甚、寡キヲアリ、而シテ水腫ト大異アル  
 ナリ

原病學通論卷之六

原病學通論卷之七目次

補給機變化ニ基ケル諸病上

補給機減衰

單純萎縮

浸潤及變化

蛋白質浸潤

脂肪浸潤

指物變化

色素浸潤

石灰變化



肌肉變性 名 澁粉變性

原病學通論卷之七 目次

原病學通論卷之七 和蘭教師 亞爾茂聯斯 講述

膳所 村治重厚

東京 熊谷直温 筆記

全 安藤正胤

補給機變化ニ基ケル諸病上

夫生體組織ハ常ニ老廢スルヲ以テ從ヒテ之ヲ

補償スル須要ノ官能アリ、補給機ト云フ、此機能

時アリテ變常スルヲアリ、之ヲ三種ニ區別ス、第

一、補給機能全カラスシテ、費耗セル組織後故也

原病學通論 卷之七 三 敬 舎



ス、其量多少減却シテ、官能モ亦自ラ障得ヲ受ク、  
第二、補給機能増盛シテ、新組織ノ成形、舊組織ノ費  
耗ヨリ多ク、而シテ組織ノ容量、共ニ増加ス、第三、  
補給機能全ク遏止シテ、其部壞疽ニ變ス、

補給機能減衰

補給ノ機能衰憊シテ、全カラサルハ、各種ノ萎  
縮ヲ起ス、萎縮ニ又三様アリ、**甲**ハ、單純萎縮ニシ  
テ、組織ノ源分、其容ト量トヲ減ス、**乙**ハ、異物ノ沉  
著ニ由リテ、組織ノ源分萎縮ス、所謂浸潤イニトシ  
テ、**丙**ハ、例之ハ、石灰、脂肪、色素等ノ、組織ヲ浸



潤スルカ如シ、**丙**ハ、組織ノ源分、其固有ノ化學成  
分ニ變化ヲ起シ、形狀ハ異ナラサルモ、官能ニ障  
碍ヲナス、之ヲ變性ト云フ、例之ハ、組織ノ蛋白質  
變シテ脂肪トナルカ如シ、殊ニ確徴ト為ス可キ  
一例ハ、埋葬セシ屍體ヲ掘リテ、検査スレハ、組織  
筋、腺變シテ、脂肪トナレリ、是ヲ以テ考フレハ、固  
有ノ組織、變化スルヲ瞭カナリ、

第一、單純萎縮

此萎縮ハ、老人ノ全體ニ於テ、生理學的ニ之ヲ見  
ル、例之ハ、皮膚及ヒ毛髮萎縮ス、又胎兒ニ之アリ、即



胎兒ノタルトヤシ體ハ後ニ萎縮ヲ起シテ其部  
ニ腎ト睪丸トヲ發育ス又病理學的ニ於テハ羸  
瘦病ニ之ヲ看ル例之ハ蜜尿病泰衰土熱ノ如シ  
司處ノ萎縮ハ其部ノ血液循環ノ不利ヨリ起リ  
又其官能ノ休止ニ由ル猶肩胛ノ運動全クラサ  
レハ上肢ノ萎縮ヲ發スルカ如シ癱瘓ト亦然  
萎縮部ニ於ル顯微鏡的變化ハ種々アリト雖未  
全ク詳明ナラス組織ノセル縮小シテ其内ニ粒  
狀物ヲ充填ス例之ハ脂肪セルニ於テハ先々蓄  
物變シテ粒狀物トナリ後全ク吸收セラレテ惟

セル壁ヲ貽ス<sup>ニ</sup>故ニセル壁細長トナリ結締  
織セルニ變ス<sup>ニ</sup>脂肪セルハ畢竟結締織セル中  
筋纖維ハ漸次ニ縮小シ隨意筋ニ在リテハ其橫  
線消却シテ軟弱トナリ通常灰白色ニ變ス而シ  
テ含蓄物ハ粒狀物ニ化シテ<sup>ニ</sup>泰衰上熱後悉吸收  
セラレ唯筋纖維ノ纖維莖ヲ貽ス<sup>ニ</sup>然レハ病  
癒エテ後斯ノ如ク變化シタルセルハ多分常態  
ニ復スルヲ以テ全ク生活力ヲ失フニ非ス  
第二浸潤及變性  
此二種ハ通常併發スルヲ多キヲ以テ茲ニ合論

原病學論 卷之十 三



セシ、乃、異物ノ組織ヲ浸潤スルト、組織ノ自ラ變性シテ、萎縮ヲ起ス者トス、

甲、蛋白質浸潤

此症ハ、蛋白質ノ細小ナル粒狀物ニテ、組織内ヲ充填スルナリ、此粒狀物ハ、蛋白質固有ノ化學反應ヲ具フ、即、強醋酸、或ハ剝篤亞斯ニ溶解シ、硫酸ト砂糖トヲ混スレハ、赤色トナル、<sup>1</sup>エーテルニハ、溶解セス、是、脂肪ニ非ル確徵ナリ、此蛋白質ノ粒狀物ヲ以テ、浸潤スルハ、組織ノ如何ヲ問ハス、皆成ル可シ、其主トシテ之ヲ發スルハ、粘膜ノ内皮

セル、腺ノ内皮セル、結締織セル、筋纖維ナリ、若、内皮セルニ生スレハ、セルノ邊緣、不明トナリ、セル中悉、粒狀物ヲ充填シ、終ニセル壁モ、共ニ粒狀物ニ變ス、故ニセルハ、消失シテ、唯、粒狀物ヲ貽スニ至ル、他ノセルノ、粒狀物ニ化スルモ、其法皆同シ、前件ノ組織ニ、浸潤ヲ起スハ、熱度ノ高キ重症ニアリ、例之ハ、泰、裴土熱、猩紅熱、尊熱、膿熱ノ如シ、恐クハ、熱度ノ増進ニ由リテ、如此キ變性ヲ起ス者ナラン、

乙、脂肪浸潤



此症ハ、血中ヨリ、脂肪ヲ滲出シテ、組織中ニ浸潤  
シ、滴粒ヲ沉着スルヨリ成ル、此粒狀物ハ、能ク  
一テルニ溶解ス、初メハセル内ニ於テ、細小ノ粒  
狀物トナレバ、後ニハ合シテ一塊トナル、輕症ハ、  
官能ニ障碍ナシト雖、重症ハ、必、障碍ヲ發ス、此浸  
潤ノ原因、一ハ營養過饒ニ基ツキ、血中ヨリ營養  
分ヲ溢出スルニ由ル、例之ハ、脂肪富有ノ食餌ニ  
過クルルルノ如シ、然ルルハ、固有ノ組織ヲ萎縮シ  
テ、脂肪セル之ニ代ル、故ニ固有纖維ヲ失ヒテ、悉  
脂肪塊トナル、例之ハ、筋纖維ノ如シ、生理學的ニ、

之ト同シキ浸潤アリ、脂肪性食餌、消化ノ際ニ、腸  
ノ内皮セル中ニ脂肪ヲ充填スルカ如シ、又肝ノ  
セルニ、脂肪浸潤ノ起シテ、其セル悉、脂肪ニ變ス  
ルアリ、其他種々ノ内皮セルノ如シ、筋モ亦之  
ヲ發ス、此因ハ、或ハ酒量度ニ過キ、或ハ火酒ヲ貪  
飲スル人ニ於テ、殊ニ然リ、蓋、呼吸作用ハ、徒一火  
酒ノ燃燒ニ費シテ、組織ヲ燃燒スルヲ能ハス、故  
ニ脂肪饒多トナル、肺勞モ亦呼吸ノ全カヲナル  
ヲ以テ、間、肝ノ脂肪變性ヲ起スルカ、脂肪浸潤  
ノ輕症ハ、顯微鏡的檢査ニ非レバ、之ヲ看ルヲ能



ハスト維、重症ニ於テハ、組織變シテ、帶黃白色トナリ、容積多少増加シ、器械ニ貧血ヲ起シテ、柔軟トナル、

丙 脂肪變性

此症ハ、固有組織ノ變シテ脂肪トナルニ他ナラズ、恐クハ、尋常ノ蛋白質、其窒素ヲ失ヒテ、變化セラル者ナラ、唯、蛋白質ヲ取リ、空氣ニ抵觸セ、ハシテ變ス、是、其一分ハ、水中ノ腐敗セシムレ、脂肪ニ變ニ、ニ、其一分ハ、揮發シ、一分ハ、窒素ヲ失ヒテ、炭酸アンモニアトナリ、揮發シ、一分ハ、窒素ヲ失ヒテ、然ルナラ、屍體ヲ中ニ埋メテ、變性シタルセル後、脂肪トナルモ亦此理ナリ、

ノ含蓄物ハ、細粒ノ脂肪ト變シテ、一大滴トナラ

ス、其量漸次ニ増加スレ、ハ、セルモ亦稍増大シテ、球形トナリ、其膜漸次ニ菲薄トナリテ、破裂シ、セル消滅シ、唯、脂肪細粒、一塊ヲ貽ス、此塊悉、吸收セラレテ、血中ニ入ル、アリ、若、多量ナルハ、白色ノ粒狀物トナリテ、組織中ニ存在シ、間、ステアリンノ結晶ヲ混ス、或、器械、殊ニ筋ニ於テハ、先、蛋白質ニテ、組織ヲ浸潤シ、後、脂肪變性ヲ起ス、脂肪變性ハ、器械ノ一分ヲ侵ス、アリ、例之ハ、筋ノ一分ニ生スルキハ、通常灰白色ニシテ、柔軟ナル斑點ヲ生ス、或ハ全器ヲ侵ス、アリ、例之ハ、



肝ノ如シ、其器增大シテ、灰白黄色トナリ、柔軟ニシテ、通常貧血ヲ起シ、官能モ亦必、多少障碍ヲ受ケ、

脂肪變性ノ因ハ、器械ノ營養不給ニ由ル、例之ハ、器械ノ用、廢止セシキノ如シ、又老衰ニ由ル、境ニ至レハ、角膜ノ周圍ニ、白色ノ環ヲ生スルヲアリ、是ノ角膜組織ノ脂肪變性ヲ起スニ由ル、之ヲ老人ノ環ト或ハ血管ニ、トロシボシト云フ、

云フ、或ハ全身ノ貧血ニ由ル、肝ノ脂肪變性スルニ由リ、或ハ全身ノ貧血ニ由ル、性ヲ起ス、

如シ、或ハ炎症ノ轉歸ニ由ル、腦ノ軟化、或ハ毒物ニ由ル、梅毒等ニ由リテ、三四日後ニ腎心、肝、脾、又常態等ニ急性ノ脂肪變性ヲ起ス、カ如シ、

ノ時ト雖、或腺ニ於テ、分泌物ヲ釀成スル片ニセシ、脂肪變性スルヲ看ル、乃婦人ノ乳房腺排泄管裏面ノ内皮セルハ、初メ脂肪ノ細粒ニテ充填シ、漸次ニ膨大シテ、球形ヲナシ、後ニ破裂シテ、其細粒ヲ以テ、初乳球、或ハ乳球ヲ造成ス、而シテ、其セルハ、皆脂肪ニ變性ス、皮脂腺ノ皮脂ヲ分泌スルモ亦同シ、又生理學的ニ、筋ノ脂肪變性ヲ起ス、

下アリ、乃子宮ノ筋是リ、分娩後五日、或ハ八日ヲ經テ、悉變脂シ、遂ニ吸收セラレテ、子宮其舊形ニ復ル、病理學的ニ於テハ、總テ腺ノセルニ此變



化例之、肝ノ如シ、此器先、灰白色、柔軟トナ  
 リテ、増大ス、然レモ、其重量ノ減却スルヲ以テ、水  
 ニ投スルモ、沉マズ、若、利刀ヲ煖メ、拭ヒ、淨メテ、之  
 ヲ截ルキハ、刀ニ脂肪ノ小球ヲ點深スルヲ見ル、  
 又其截断面ニ、紙ヲ貼シ、手掌ヲ以テ壓スレハ、脂  
 肪紙ニ深ム、此脂肪變性ハ、多分全身ノ貧血ニ由  
 ル例之ハ、肺勞、或ハ悪性腫瘍如癌腫ノ為ニ、發ス  
 ル貧血ニ由ルカ如シ此時腸ハ、多分患者トシテ、消  
 化ニ異状アリ、或ハ磷、砒等ノ毒物ニ由リ、或ハ肝炎  
 ニ由リテ、脂肪變性ヲ起シ、或ハ亞爾箇爾、其他酒

類ヲ過量ニ用ヒレバ、同シク之ヲ發ス、其他ノ腺  
 ニ於テモ、内皮セルニ、脂肪變性ヲ起ス、例之ハ、武  
 雷度氏腎病ノ如シ、持久スルキハ、細尿管中ノ内  
 皮セル、悉、此變性ノ為ニ、類廢ス、又單乳炎ニ於テ、  
 輸精管裡面ノ、内皮セルニ、脂肪變性ヲ起シテ、類  
 廢スルコトアリ、是、必シモ、炎後ニ、發スルニ非ス、若  
 人ニ於テ、然ルコトアリ、此ノ如ク、變性ヲ起セハ、其  
 器全ク萎縮スルコト多シ、又水腫ノ為ニ、登膜ノ内  
 皮セル變性シ、加多爾ノ後ニ、粘膜ノ内皮セル、同  
 シク變性スルコトアリ、其他緊要ナルハ、筋ノ脂肪



變性ナリ、不隨意筋ニ在リテハ、氣管枝粘膜炎ノ時ニ筋纖維モ亦侵サレテ、脂肪變性ヲ起シ、其筋層收縮力ヲ失ヒテ、氣管枝膨大ス、之ヲ「ブロンカ」イ、エクタキシト云フ、其膨大スル所以ハ、粘膜炎ヨリ粘液及膿ヲ分泌シテ、氣管枝中ニ鬱積スレハナリ、此ノ如ク一回膨大スレハ、加多爾全ク治スルコトナシ、胃管ノ筋纖維モ亦同シク脂肪變性ニ由リテ侵サル、コトナリ、然ルハ、胃管ノ處々ニ膨大ヲ生ス、氣管枝ニ於テモ亦然リ、隨意筋モ亦同シク脂肪變性ヲ受ク、是其收縮力、妨碍セラ

ノ傷害ニ由リテ、麻痺スルハ、如シ、又筋ノ炎後ニ、之ヲ發ス、脂肪ニ化スル組織、吸收セラレ、其ハ、其筋瘦削スルコト常トス、大患ノ後、筋ニ萎縮シ、同脂肪變性ノ須要ハ、心臟筋肉ノ脂肪變性、殊ニ下房ノ筋ト、乳頭筋トニ、之ヲ視ル、盖急性病後ノ全身衰弱ニ由リ、後、泰然ト熱又老人ニ發ス、或ハ冠動脈ノ疾患、心囊炎、心ノ肥大等ニ由ル、此病ハ下房ノ收縮、全クヲサレテ、以テ、脈弱トナリ、遂ニ斃ル、一般ニ之ヲ心ノ麻痺ト云ハル、其實ハ脂







リ、然レモ、癩病ハ、先、神經ニ、脂肪變性ヲ起シテ後、  
 筋ニ及フ、始メハ、神經莖膜ニ、之ヲ發シ、所謂癩腫  
 ヲ生シテ、髓質ヲ壓迫ス、血管ノ脂肪變性ハ、通常  
 之ヲ「アテロ」ト云フ、主トシテ、動脈ト、毛細管ト  
 ニ生シテ、靜脈ニ稀ナリ、先、血管内層ノ外部ヨリ  
 脂肪變性ヲ始ム、故ニ、此時、血管ノ裏面ヨリ、之ヲ  
 視レハ、内層中ニ少許ノ脂肪細粒アリ、此細粒、漸  
 次ニ増大シテ、互ニ合著シ、脉壁中ニ、脂肪ヲ充盈  
 セル室ヲ生ス、内層ハ、總テ如斯變化ヲ受ケテ、終  
 ニ筋層ニ蔓延ス、大動脈ニ、之ヲ生シテ、非常ニ蔓

延スル「アテ」持ニ大動脈弓ニ、最ニ生シ易シトス、  
 内層ハ、漸次ニ菲薄トナリ、遂ニ、血管内腔ヲ閉  
 クルハ、血液其室中ニ入りテ、動脈瘤ヲ生ズ、或ハ  
 血管内ニ開口セサルモ、血管漸次ニ抗抵力ヲ失  
 ヒテ、血壓ノ為ニ擴張シ、又一種ノ動脈瘤ヲ起ス  
 而シテ、兩種共ニ擴張ノ極ニ至レハ、終ニ破裂ス、  
 其他毛細管モ亦同シク、脂肪變性ヲ起シテ、破裂  
 シ易シ、殊ニ微細ナル者ニ多シ、腦ノ毛細管或ハ脂  
 肪變性ノ為ニ、血管ノ裏面、粗糙トナリ、纖維凝着  
 シテ、「ドロ」シボシスヲ起ス、「アテ」總テ血管ノ脂



脂肪變性ハ、老人ニ多シトス、又尿管ト同シク心ノ  
内膜、或ハ瓣膜ニ、脂肪變性ヲ起ス、アリ、然ルキ  
ハ、心ノ瘤腫ヲ起ス、瓣ニ在ルキハ、其不全閉鎖ヲ  
起ス、又心内ニ「ドロソボシ」区ヲ生スル「アリ」、心  
ニ生スルト、血管ニ生スルトノ差ハ、心ニ在リテ  
ハ、内膜急性炎ニ因リ、動脈ハ、慢性炎ニ因リテ生  
ス、  
以上論スル所ノ脂肪變性ハ、筋纖維實質中ニ在  
ル者ナリ、其他筋纖維間ノ結締織中ニ、脂肪ノ沉  
着ヲ起シ、壓迫ノ為ニ、筋纖維ノ萎縮ヲ起ス者ア

リ、殊ニ肥滿家ニ多シ、又脂肪ヲ製造スル動物例  
之ハ、鷺ト雁トニ多シ、之ヲ纖維間結締組織ノ脂  
肪肥大ト稱シテ可ナリ、

### 丁、色素浸潤

此症ハ、出血シタル器械ニ之ヲ生ス、血球ノ蛋白  
質ハ、脂肪變性シテ、吸收セラル、ハ、既ニ論スル  
カ如シ、其色素、獨顆粒狀、或ハ結晶形ヲナシテ停  
止シ、通常暗赤色ナリ、色素ノ浸潤ハ、生理學的ニ  
之ヲ見ル、乃、卵巢ノ「メラヒア」胞破裂ノ後、血中  
ノ色素ヲ以テ着色シ、其組織ハ、遂ニ收縮シテ癒



痕ヲ貽ス之ヲ黃體ト云フ、病理學的ニ之ヲ發スルハ、一切ノ器械ニ在リ、殊ニ内皮、水脉腺、肺、筋、腦等ニ多シ、最著シキハ、皮膚ノ「ルビギ」ルンボニ色素ヲ保ツナリ、例之ハ、先天母斑ルンボノ如シ、又慢性潰瘍ニテ、皮膚ニ饒多ノ色素ヲ浸潤スルアリ、例之ハ、脚ノ慢性潰瘍ニテ、其脚黑色ニ變スルカ如シ、又水胞ノ後ニ然ルアリ、總テ皮膚ヲ刺衝スル者ハ、皮膚ニ色素ノ浸潤ヲ起ス、例之ハ、虱ノ群生ニ由ルカ如シ、其然ル所以ハ、刺衝ノ為ニ、持スノ充血ヲ起シ、組織中ニ少量ノ血液

ヲ洩スニ由ル者ナラシ、其他皮膚ニ、色素ノ沉着ヲ起ス、其理知ル可カラサル者アリ、乃チ暫時間ニ、無數ノ暗褐色ノ小點ヲ生ス、之ヲ「イソシ」病ト云フ、イソシ氏ノ學說ニ據レハ、副腎ノ脂肪變性ニ由ルトス、然レハ、副腎ニ患害ナクシテ、此病ヲ發スルアリ、真理ニ至リテハ、未詳明トラス、色素浸潤ノ最生シ易キハ、眼球ノ脉絡膜ニシテ、種々ノ疾病如シニ由リ、黑色輪狀ノ斑點ヲ生スルコト多シ、

戊、石灰變性



此症ハ、石灰ノ分子ニテ、組織ヲ浸潤スル者ニシテ、通常炭酸、或ハ磷酸ト、抱合セリ、或ハ單ニ苦土ヲ沈著シ、又石灰苦土、相混合シテ、存スルコトアリ、腺ノ分泌物中ニ浸潤スルキハ、之ヲ結石「カルキ」ト云フ、例之ハ、唾腺ノ唾液中ニ浸潤ヲ起シテ、水分ハ、吸收セラレ、石灰鹽類ハ、固形分ニ沈著シテ、漸次ニ稠厚硬固トナル、之ヲ唾石ト云フ、又腺ノ分泌物、及、排泄物、其成分ヲ變スレハ、鹽類容易ニ沈著シテ、結石ヲ生ス、例之ハ、尿ノ、強キ酸性トナリ、或ハ中性トナル片ニ、鹽類多ク尿中ニ混シテ、

細尿管ヲ刺實シ、殊ニ多量ナルハ、尿石ヲ造成スルカ如シ、胆汁モ亦其成分ヲ變スルキハ、同シク胆石ヲ造成ス、故ニ石灰ノ、組織中ニ浸潤スルヲ石灰變性ト云ヒ、液中ニ浸潤スルヲ結石ト云フ、石灰變性ハ、組織中ニ多量ノ石灰鹽ノ小粒、沈著スルヲ以テ、組織ヲシテ不透明トナラシム、此小粒、漸次ニ増大シテ、不整ノ有角塊ヲ成シ、通常淺灰白色トナリテ、組織ノ造構ヲ辨別ス可カラサルニ至ル、若其部ニ、鹽酸、或ハ硝酸ヲ注ケハ、炭酸ハ遊離シ、鹽類ハ悉ク溶解スルヲ以テ、組織モ稍

原病學通論 卷之七 十三 三 九



清澄トナリ、石灰變性ト、化骨トノ差異ハ、甲ハ鹽類ノ分子、唯、不整ニ組織内ニ浸潤シテ、乙ノ如ク鹽類ト組織ノ原分ト、化學的抱合ヲナサス、故ニ骨中ニハ、真ノ骨球アレ、石灰變性セル組織中ニハ、之ヲ見ス、而シテ其セルハ、鹽類ニテ覆ハレ、官能全ク廢絶ス、殊ニ石灰變性ヲ起ス者ハ、軟骨、澄膜、血管、筋、腱、溢出セル血液、血球、膿球、種々ノ癌腫等ナリ、又生理學的ニ、腦ノ松子腺中、之ヲ見ル、**腦砂**ト稱ス、其他腦室ノ脉絡叢ニ之アリ、總テ滲出物ノ萎縮シテ、脂肪變性ヲ受ケサルルハ、石灰

變性ヲ起スヲ常トス、而シテ組織一回石灰變性ヲナスルハ、荏苒トシテ變スルヲナシ、又時トシテ、石灰浸潤ス、轉移性ト成リテ、處々ニ生スルアリ、例之ハ、骨痛、骨癆ニ於テ、類廢セル骨組織ヲ吸收シ、其鹽類ハ、運輸セラレテ、諸種ノ器械ニ至ルカ如シ、乃、腎ノ三稜體、肺組織、胃粘膜、厚腦膜等ニ至ルトアリ、其他轉移性ニ、鹽分ノ沉着ヲ起スハ、痛風ニシテ、種々ノ尿酸鹽、血中ヨリ出テ、關節ノ軟骨、或ハ靱帶ニ沉着スルカ如シ、又、腱皮膚、腎及耳廓ニ、沉着スルトアリ、○**結石**ハ、諸腺ノ分泌



液中ニ生ス、例之ハ、腺ノ粘膜加答爾ニ由リテ、膜面ヨリ、分泌セル粘液ハ、腺内ニ瀦留シ、其液分ハ、吸收セラレ、固形分、獨、硬固トナリテ、殘留シ、後之ニ石灰質ヲ沈著スルカ如シ、唾腺ノ結石ニ於ルモ亦然リ、唾石ハ、必、白色ニシテ、恰、白堊ノ如シ、其他諸部ニ之、アリ、乃、包莖ノ前皮、翻轉ス可カラシル者ニ生ス、是、龜頭ヨリ分泌スル脂液中ノ液分、吸收セラレテ、固形分ヲ殘シ、後石灰ヲ以テ、浸潤スルナリ、之ヲ前皮結石ト云フ、又婦人ノ腺中ニ存スルコトアリ、是、腺ノ分泌液、變化スルコト前ニ同

シ、又極メテ稀ナレバ、食喉、氣管枝、肺等ニ生スルコトアリ、此結石、多分ハ、炭酸石灰、磷酸石灰ヨリ成リ、或ハ、炭酸苦土、磷酸苦土ヨリ成ル、而シテ其中心ニ核ヲ含メリ、此核ハ、腺ノ分泌液ノ、凝固乾燥シテ、成ル者ニ他ナラス、既ニ説ケル静脈石モ亦之ト同種ニシテ、静脈壁ノ一部擴張シテ、纖維素茲ニ凝著シ、其表層ニ石灰質ノ沈著ヲ起ス者トス、又分泌液ヨリ、沉澱物ノ沈著セルニ由リテ、結石ヲ生スルコトアリ、例之ハ、尿、着、亞爾加里性ノ泡釀ヲ起スキハ、三鹽基磷酸鹽ノ沉澱物ヲ生シ、或ハ



酸性ノ泡醸ヲ起スルハ、尿酸、或ハ尿酸鹽ノ沉澱  
物ヲ生スルカ如シ、又胆汁ノ性質變化シテ胆石  
ヲ造成シ、脾液ノ性質變化シテ、脾石ヲ造成スル  
カ如シ、然レモ、此等ノ結石ハ、如何シテ生スルカ、  
未明辨ヲ得ス、恐クハ、液質ノ變性ニ由ルヲラシ  
此等ノ結石ハ、常ニ粘膜面ヲ刺衝シテ、加多爾ヲ  
起シ、多クハ、播擲性ノ疼痛ヲ覺ユ、胆石ナルハ、  
上腹部ニ疼痛ヲ起シ、屢、囊壁ニ潰瘍ヲ生シテ、穿  
通スルコトアリ、或ハ然ラスシテ、腺ノ排泄管ヲ閉  
塞スルコトアリ、其時ハ、腺管膨大シテ、囊腫ヲ生ス、

腎臟ノ分泌液、鬱積シテ、結石ヲ生シ、其細分子ヲ  
輸尿管ニ、輸送スルハ、其管閉塞シテ、無數ノ囊  
腫ヲ生ス、結石ハ、又腺ノ近傍ニ、炎ヲ生スルコト  
アリ、例之ハ、靜脈石ノ滞在セル近傍ノ組織ハ、炎ヲ  
發スルカ如シ、結石中、最緊要ナル者ハ、尿石、及、胆  
石ナリ、尿石ハ、膀胱、或ハ腎臟ニ生シ、腎臟ニ在ル  
ハ、尿ト共ニ膀胱ニ輸送シテ、其容積ヲ増大ス、  
膀胱内ニ生スルハ、尿ノ亞爾加里性、或ハ酸性  
泡醸ニ因リテ生ス、或ハ又異物ヲ核トナシテ、其  
周圍ニ沉澱物ヲ附着ス、例之ハ、粘液、凝固セル血



液、チ、テ、ルノ末端、霰丸、或ハ腸ノ潰瘍ヨリ來  
 一ル異物乃腸壁、膀胱、共ニ穿通シ、其内ノ如シ、膀胱内ニ生スル結石ハ、其數一定セス、然レモ常ニ一塊トナルヲ多シ、又時アリテ、數塊ヲ生スルヲアリ、然レキハ、石ノ外面、互ニ相摩擦シテ、滑澤トナル、結石ハ、常ニ膀胱壁ニ附着セスシテ、遊離スル者ナリ、又稀ニ膀胱底ニ、凹處ヲ生シテ、其内ニ埋藏スルヲアリ、或ハ壁面ニ、潰瘍ヲ生シテ、此ヨリ攝護腺中ニ入ルヲアリ、此結石、多クハ尿酸、或ハ尿酸鹽等ヨリ成ル、其色澤、通常茶褐色ヲナ

シ、其面滑澤ニシテ、圓形ナリ、之ヲ截斷スレハ、中心ノ周圍ニ、重層アルヲ看ル、斯ノ如キ尿石ハ、專尿ノ酸性泡釀ヲ起セシキニ之ヲ生ス、或ハ又尿酸ヨリ生スルヲアリ、是亦同シク酸性酸酵ノ時ニ在リ、大人ハ、一般尿酸石ヲ多シトスレバ、小兒ハ、常ニ尿酸ヲ生ス、其色暗赤ニシテ、甚硬ク、層々不整ニシテ、分明ナラス、結石ノ表面ハ、粗糙ニ屹立シ、其形桑椹ニ似タルヲ以テ、桑實石ノ名アリ、多クハ、三鹽基磷酸鹽ヨリ成ル、其色灰白ニシテ、撓屈性ヲ有シ、容易ク稀薄ノ酸類ニ溶解ス、通常







此三種同時ニ存スルヲ多シ、胆石ノ症候ハ、死後ニ非レハ、知ル可カラサルヲ多シ、蓋、上腹部ニ、痙攣性疼痛ヲ覺ヘテ、胆石ヲ吐シ、或ハ大便ト共ニ排出スルヲアリ、或ハ體外ヨリ胆嚢ニ觸レテ、知リ得可キヲアリ、其危険症ハ、總管ヲ閉塞シテ、所謂黃疸ヲ續發ス、

**已、豚肉變性**

一名澱粉變性

此症ハ、諸器組織ノ原分、變シテ一種ノ白色透明ニシテ、豚脂ノ如キ質トナル者ナリ、其性澱粉ト同シク、沃顔ニ逢フテ、多少藍色ヲ呈シ、其後少許

ノ硫酸ヲ注ケハ、濃藍色ニ變ス、是其名ノ由リテ、起ル所ナリ、然レモ、真ノ豚肉ニ非ス、又真ノ澱粉ニ非ス、唯、蛋白質ノ變形物ニ他ナラス、此變性ハ、水脉腺、脾、肝、腎、腸ノ粘膜、心、及、子宮ノ筋組織ニ之アリ、又同時ニ諸器ニ、發スルヲアリ、顯微鏡ヲ以テ、其部ヲ看ルニ、先、器械ノ細動脈、及、毛細管侵サレテ、脉壁增厚シ、略、二倍ニ至リ、其内徑ハ、殆、閉塞シ、毛細管壁ノ核ハ、看別ス可カラスシテ、白色透明ノ管ニ變スレモ、尚、固有ノ形狀ヲ失ハス、其極度ニ至レハ、全ク血液ナキニ至リ、脉管ノ機能廢



絶シテ、其患害遂ニ毛細管ヨリ近部組織ノ原分ニ蔓延ス、例之ハ、肝ニ在リテハ、肝セル腫脹シテ、蒼白色透明ニ變スルカ如シ、然レモ、其セル顔敗スルニ非ス、唯、變性スルヲ以テ、能ク之ヲ看得ス可シ、或ハ此ノ如クシテ、全肝ヲ侵ス、アリ、又腎ニ在リテハ、主トシテ皮樣質ニ患害ヲ生ス、先モ細管ヨリ、細尿管ニ蔓延シテ、尿管腫脹シ、變シテ蒼白色透明トナル、然レモ、其形狀ヲ失ハス、脾ニ在リテハ、セルビシ胞侵サレ、重症ハ、全脾悉、白色透明ニ變ス、腸ニ在リテハ、先、粘膜ノ腺ヲ侵シ、或

ハ粘膜ノ全面ニ蔓延シ、加之其筋層モ亦侵サル、アリ、アリ、總テ此變性ニ罹レル器械ハ、皆擴張シテ、蒼白色トナリ、乾燥シテ、透明ニ變シ、極劇ノ貧血ヲ發ス、豚肉變性ハ、持久ノ化膿ヲ併發セル諸病ニ於テ、患者非常ノ悪液質トナリ、或ハ貧血トナル片ニ發ス、例之ハ、骨瘍、肺癆、腸ノ潰瘍、皮膚ノ各種潰瘍ノ如シ、然ル片ハ、患者概、死ヲ以テ終ルヲ常トスレモ、唯、梅毒ニ起因シ、極メテ輕症ナル者ハ、治スルヲ得可シ、此診斷、多クハ難シトス、唯、患者持久ノ化膿ヲ患フル片ニ、兼テ肝、脾等肥



大シ、或ハ惡液質トナリ、或ハ下肢ニ浮腫ヲ起シ、  
 或ハ間歇性ノ蛋白尿ヲ起シ、而シテ心ノ疾患ヲ  
 見サレハ、此變性ヲ診斷スルコト能ハス、何トナレ  
 ハ、心病ハ、上ノ諸症ヲ發スルコト多ケレハナリ、總  
 テ此變性ハ、組織ノ營養、不給ニ由リテ發ス、是醗  
 膿荏苒タルヲ以テ、多ク組織ノ蛋白質ヲ失ハハ  
 ナリ、或ハ健康ノ組織ニ小圓體ヲ生シ、甚、豚肉變  
 性ニ類似スルコトアリ、之ヲ**澱粉質體**ト云フ、沃顛  
 或ハ硫酸ニ逢フテ、同一ノ反應ヲ呈ス、主トシテ  
 腦、脊髓、神經組織ニ之アリ、又攝護腺ニ生シ、時ト

シテ此腺ヨリ過量ニ漏泄シテ、尿中ニ混スルコ  
 トアリ、其症候、一モ確知ス可キコトナレ、



原病學通論卷之七  
三十三

原病學通論卷之七





